

# 「まぼろしの焼きものに挑戦したい」 人間国宝の陶工

いしくろ 宗磨  
石黒 宗磨



## 陶芸こそ一生の仕事

「こんな陶器が、世の中にあつたとは！」

これが、石黒宗磨さんと「曜変天目茶碗（茶の湯に用いる鉢形のまっ茶茶碗）」との出会いでした。見れば見るほど、美しい。

宗磨さんは、東京美術クラブに展示されていたこの茶碗に、すっかり心を奪われてしまいました。

茶碗の地肌には、黒のうわ薬がたつぷりかけられ、中には瑠璃色の玉が、不規則に一面にまき散らされています。そして光があたると、深い青紫色や玉虫色などいろいろな光を放つのです。

宗磨さんは、長い間、その場で立ち止まったままでした。

しかし、宗磨さんの心の中では、激しい気持ちが渦巻いていました。

自分も、このように美しい焼きものを作るんだ！



この中国の焼きものは、何という美しさだ！  
一目で忘れられなくなってしまっただ。  
こういうすばらしい焼きものを  
自分も作り出したい。

宗磨さんは、その人間国宝の第一号なんだって。

文字通り、「日本の国の宝」ということですね。

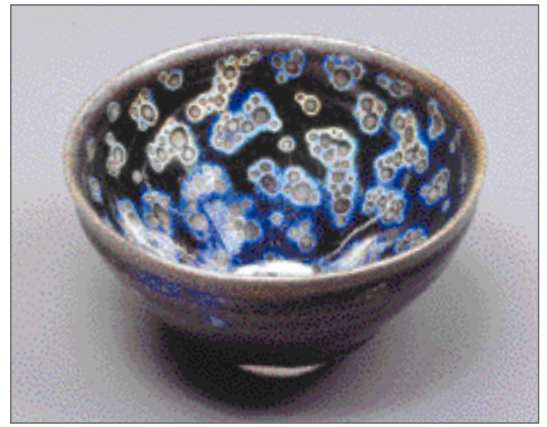
人間国宝とは、「優れた高い技術をもつ人である」と、国から認められた人のことだよ。



## 2 文化の花を咲かせよう

### 石黒宗磨さんのミニ年表

西暦	年齢	
1893年		射水郡作道村字久々湊(現在の新湊市)に生まれる
1911年	18歳	富山中学校(現在の富山高校)を中退する。転学した慶応義塾大学普通部も退学する
1918年	25歳	「曜変天目茶碗」に出会う
1919年	26歳	東京で窯(仕事場)を築き、本格的に陶芸に取り組む
1936年	43歳	京都に窯を築く
1937年	44歳	パリ万国博覧会に出品し、銀賞を受賞する
1943年	50歳	「木の葉天目」を完成させる
1950年	57歳	パリの日本陶芸展に出品し、高い評価を受ける
1955年	62歳	国の重要無形文化財保持者(人間国宝)に認定される
1968年	75歳	亡くなる



宗磨さんが陶芸の道を歩むきっかけになった曜変天目茶碗。(静嘉堂文庫美術館所蔵)

たとえどんなに難しくても、美しいものを生み出すことに挑戦しようという気持ちで、むくむくと芽生えていたのです。

### 優れた技法を追い求める日々

それからというもの、宗磨さんは、本格的に陶芸に打ち込む日々を過ごすようになりました。

定まった収入もなく、その日暮らしの苦しい生活でしたが、どんなに苦しくても、陶芸の技術を高める努力はおこたりませんでした。

そんな宗磨さんの様子に、親戚や知人は

「宗磨さんは、道楽者じゃあ」と冷たい目を向けていました。

芸術家の中にも、「石黒宗磨の作品は、中国古陶磁のまねをしているだけだ」と、宗磨さんの作品を厳しく批判する人もありました。

しかし、宗磨さんは、周囲の冷たい言葉など、全く気にしませんでした。弁解することすら、しなかったのです。

宗磨さんの心にあるのは、ただ陶芸のことだけでした。ひたすら、古き良き伝統の技に挑戦し、研究することで、自分だけの世界を切り開こうとしていたのです。

### まぼろしの技法を再現

「よし、今度は、『木の葉天目』に挑戦してみよう」「木の葉天目」というのは、700年ほど前の中



宗磨さんの作品「釉彩干柿文壺」。(新湊市博物館所蔵)

国(宋の時代)で、さかんに作られていた茶碗です。茶碗の地肌(じみ)に木の葉を焼き付ける独特の焼きもので、その技法は、宗磨さんが活躍した当時、本場の中国でも誰も知らないという難しいものでした。

宗磨さんは、その難しい技術に挑んだのです。

宗磨さんは、寝るのも食べるのも忘れるくらい、仕事に打ち込みました。いろいろな木の葉を使って焼いてみましたが、どうしても途中で葉が動いてしまい、思うように仕上がりにません。

「どうしてもだめだ。おれの手では、作ることができないのか」

「いいえ、あなたなら、きつと作ることができます。必ずうまくいく時が来ますよ」

悩み苦しむ宗磨さんを、奥さんはいつも温かく励ましました。

ある日、枯葉を集めてたき火をしていたときのこと。宗磨さんは、大変なことに気づきました。



宗磨さんの作品：宗磨さんは、日本のもの(楽・信楽・唐津・織部・越中瀬戸)、朝鮮のもの(三島・粉引・黒高麗)、中国のもの(唐三彩・柿天目・木の葉天目)など、さまざまな形式の陶器を研究し、挑戦しました。

たいていの葉は赤く燃えて灰になっていくのに、ムクの葉だけは、その形を残したまま白くなっているのです。

「おやつ、これはー！」

その瞬間、体の奥底に熱いものがわき上がってきました。

宗麿さんは、すぐに仕事場に向かいました。そして、さっそくうわ薬をつけたムクの枯れ葉を試してみしました。

しかし、一度ではうまくいきません。

「大丈夫、うまくいくはずだ。うまくいつてくれ！」そう願いながら、宗麿さんは期待と不安が入り混じった気持ちで、茶碗の焼き上がるのを待ちました。そして、おそろおそろ取り出してみると、葉

の形は、乱れることもよじれることもなく、見事に残っているではありませんか。

宗麿さんは、畑仕事に出ていた奥さんを大声で呼び、肩を抱き合って、うれし涙にむせびました。

陶芸を始めて20年余り、宗麿さんは、50歳になっていました。

## 一生をかけて追い求めた夢

完成した「木の葉天目」は、世間の人をあつと云わせました。それから、宗麿さんは、さまざまな技法に挑戦し、風合いの異なる作品を生み出してきました。

パリで開かれた現代日本陶芸展では、「白地チヨーク描バラ文鉢」「失透釉鉄流文壺」などを出品し、世界的な称讃を浴びるまでになったのです。

日本の政府も宗麿さんの腕前をたえ、重要無形文化財保持者（いわゆる人間国宝）に認定しました。

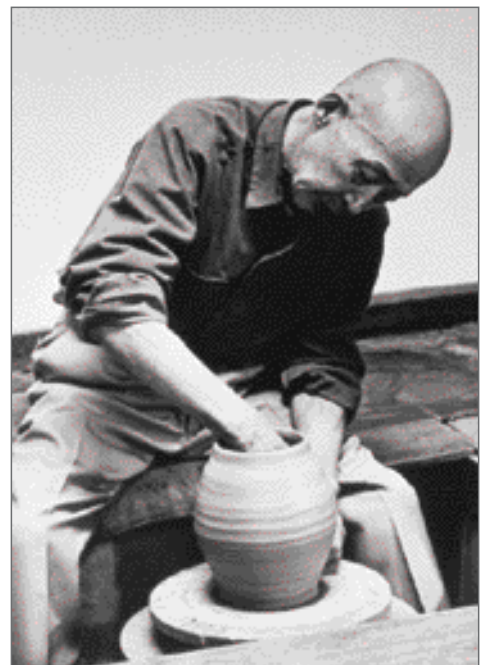
しかし、宗麿さんは決しておごり高ぶらず、さらに陶芸の研究を続けました。陶芸の道に入るきっかけとなった、あの「曜変天目茶碗」を、まだ完成していなかったからです。

残念ながら、宗麿さんはその夢を實現できませんでした。

しかし、宗麿さんのさまざまな作品は、私たちに感動を与えてくれます。ちょうど、宗麿さんが初めて「曜変天目茶碗」を見たときのような、そんな感動を。



宗麿さんの作品「千点文茶碗」



仕事中の宗麿さん。宗麿さんの作品は、素朴であたたかな印象だと言われている。



京都・八瀬にあった宗麿さんの家。



宗麿さんとふるさと：宗麿さんの陶房（仕事場）の入り口には、「棚庵（くあん）」という木彫りの額がかけられていました。生まれ故郷の「久々湊（くなくと）」への思いを込めて、音の似ている名前をつけたのでしょう。

## 宗磨さんのエピソードと感想

新湊市立作道小学校5・6年生のお友達が宗磨さんについてまとめてくれました。

### 幼少時代のエピソード

身体が大きく、いつも近所の子もたちを5～6人引き連れ、小舟をこいで村はずれまで行き、空気銃で、スズメやキジなどを捕っていました。大変腕前がよく百発百中といわれるくらいによく撃ち落としたそうです。

**感想** 小さい頃はわんぱくでいたずら好きだったんだなあ。でも、小さい頃からいろんなことに才能があることもわかるよ。  
(5年 明 大貴さん)



6年 米田祐介さん

### 作家時代のエピソード

宗磨さんは、一つの作品に挑戦することに失敗を繰り返していました。しかし、どんな時でも、全くメモやノートをとることをしない人で、全部頭の中に入れ、体で覚えていったそうです。

**感想** 土器を作るのに、かなり情熱をかけていると感じた。その熱意がなければ、あのようなりっぱな作品はできないだろうな。  
(5年 吉田美緒さん)



6年 森 浩美さん

宗磨さんの石碑。「人間国宝 宗磨」ではなく、「陶工 宗磨」という文字に、ひたすら陶芸の道を歩んだ宗磨さんの思いが感じられます。



石黒宗磨さんは、一人で黙々と努力を重ねて陶芸を極めました。一方、学校でさまざまなことを学んで成長する人もいます。次のページで紹介する馬場はるさんは、富山の子どものために学校をつくった人です。

宗磨が好んで愛用した座右の銘  
縄鋸木断  
根気よく努力すれば、縄で木を切ることもできる。それくらい努力することが必要だということです。



宗磨さんの石碑を見に行った新湊市立作道小学校5、6年生のお友達。